

認識的二次元主義の哲学的コミットメントの明示化

仲宗根 勝仁 (Katsuhito NAKASONE)

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程 / 日本学術振興会特別研究員 DC1

デイヴィッド・チャーマーズの 1996 年の著作『意識する心』以降、二次元意味論の議論が活発になされてきた。特に、チャーマーズが 2000 年代に提唱した認識的二次元主義 (epistemic two-dimensionalism) は、他の言語哲学者との論争を引き起こし、その論争は現在も継続中である。認識的二次元主義の基盤となる認識的二次元意味論 (epistemic two-dimensional semantics) は、彼独自の分類法によって他の二次元意味論との比較はなされている (Chalmers 2006) が、彼の他の哲学的理論 / 立場と関連付けて具体的かつ統一的に論じられることは少ない。

本発表の目的は、認識的二次元主義、特にチャーマーズの認識的二次元主義が持つ哲学的コミットメントを明示化することで、認識的二次元主義にまつわる論争の見取り図を得ることである。本発表は次のように行う予定である。まず、認識的二次元意味論の基本的な枠組みを紹介する。具体的には、カルナップ＝ルイス的な内包意味論、二次元意味論に共通する一次内包と二次内包の区別、チャーマーズが独自に定式化した認識的に解釈される一次内包 (「認識的内包 (epistemic intension)」と呼ばれる)、基礎的な真理から他の真理を推論する能力を示す判読能力 (scrutability) の概念について説明する。それから、認識的二次元主義のもう一人の代表者と目されるフランク・ジャクソンや、メタ意味論的解釈に基づく二次元主義を提案するロバート・スタルネイカーらの二次元主義的理論とチャーマーズの意味論とを比較することで、チャーマーズの意味論的 (あるいは言語哲学的) 立場を明らかにする。その上で、チャーマーズの認識的二次元意味論あるいは認識的二次元主義が表象主義や自然主義的二元論、内在主義などの哲学的立場といかなる関係にあるのかを明らかにする。